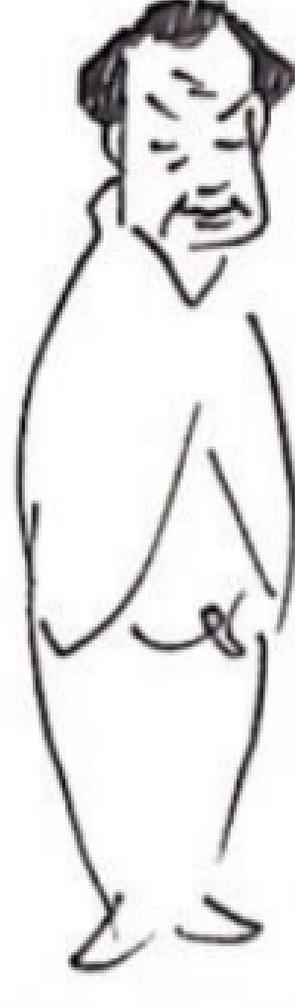


# 不定期連載

鈴木 清

第一話



「私のオチオチ」

鈴木清の出身地は

坂下の町内が「坂下」と

言われてゐる。



坂下の町内が「坂下」と言われてゐる。坂下の町内が「坂下」と言われてゐる。

父、清作と(西念堂)



母、こい(英田)



「おチオチ」

高橋は好んだ父は

「ハイハイ」

高橋屋などの

行商をこいた

か、おチオチ

「おチオチ」



どうにもなる

ゆゑのなるなり、

郷里を後に

しるはしは

「おチオチ」

「おチオチ」



目指すは北海道は

夕張。



「おチオチ」

「おチオチ」

「おチオチ」

「おチオチ」

「おチオチ」

「おチオチ」





# イベント トークイベント 藤原 開

館内で展示してある「柳津  
田鳥瞰図」はご覧になり  
ましたか？日本画家の川合  
南菜子さんに制作してい  
ただいた作品になります

が、田民の方、来館者にとって  
距離の近い作品として音  
まわります。そんな本作に  
ついでトークイベントを

**一月十三日十四時**

から行います。  
詳細は東面に一緒に  
記載してあります。



会津若松だ  
会津？  
駅員は九州の若松  
だと思っております、会津  
若松となると「だめだ」  
の一点張り。



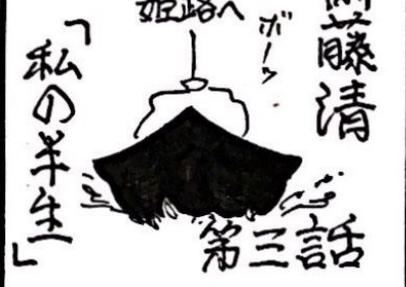
泣き泣き  
線路沿いに  
寺へ戻ろうと  
した  
道中、  
寺男に  
発見され、  
寺へ連れ  
戻された。  
寺男



度を越した寺嫌  
が夕張へ  
戻る  
要因と  
なり、  
寺小僧  
事件に  
ピリオドが  
打たれた。



斎藤清  
第三話  
私の羊生



寂しさをよぎらわ  
すため、池の魚と  
たわむれる。



駅に着き、帰郷す  
るために駅員と  
問答を繰り返した。



姫路に着いたが話  
と違ひ同じ年頃の  
小僧などいなかった。  
寺男  
大僧正  
二十四の坊主



それでも寂しさが  
増さり大僧正  
書置き  
を  
寺を  
飛び出した。



若松に着いたら  
親族の切符代を  
払うから、汽車  
に乗せられ  
若松のどこに  
行くのか？



夕張へ戻り男女共学  
の小学校では総代を  
務める卒業。その後、  
男女別々の  
高等  
科に  
進学。成績は  
ふるわなかったが大正十年  
の春、無事卒業。つづ  
とにかく卒業を終えた。



「私の半生」

第四話

不定期連載  
卒業を終えた清

卒業後、小梅の知り合いの薬局が奉公人を  
求めているとのことで、決まった職業が  
なかったため、薬局なら  
将来薬剤師になれる  
からと言われるよまよ、卒業  
と同時に小梅へ出た。



開店したばかりの薬局は

そこでは毎日

ふうしよに山のよう  
にカレンジャーを入れて



二十代の若主人と  
おはあさん  
の二人暮らしだった。

お得意を  
開拓してこい  
と言われた。

吹雪の中、  
一軒ずつ、  
配って歩いた。

その中の産婆

その家には

店は吹雪でも

まんは、  
いつも  
温かく  
迎えてくれた。

病室  
がちな  
美しい  
娘さんがいた。

夜でもあけて  
いた。店名の  
入った火鉢に  
あたりながら  
客待ちをするのだ。

食事は実に

薬局の家族が食べた

夜の店番の

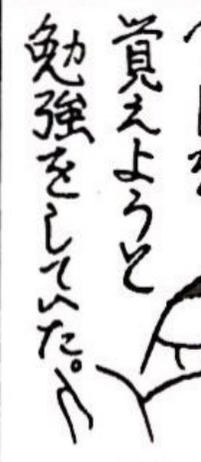
粗末なもの  
だった。

残りのおこげ  
を炊き直した  
黒いおかけの  
ようなものを  
毎日食べさせられた。

間、アルファ、A、B、C、D、  
ベットを  
買えようと  
勉強をしていた。



とばかり、  
主人は  
私から本を  
取り上げて  
しまった。



が、

とばかり、

薬局の小僧として入ったが、  
とても薬剤師にしてくれそ  
うな雰囲気ではなかった。



薬局の小僧  
に勉強は不要な  
ので

とばかり、  
主人は  
私から本を  
取り上げて  
しまった。

こともなく、年をとって  
い配が脳衰をよぎらうようになった。  
つづく...

斎藤清

私の羊生

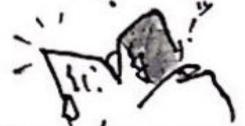
第五話

不定期連載

郵局に奉公に出ていた私(清)は、そのころから雑誌に童謡を投稿し始めていた。



たまに私の書いた童謡が雑誌に掲載されることがあった。そんなときはとてもうれしかった。



そして掲載された童謡に、作詩をしたときのイメージの絵付けをすることが目取大の楽しみであった。



詩らしいものを書くと、それにイラストをかかせておけば、いつまでも続けられる。価格は、小学生の貯りそのままでもかもしれない。かく楽しみを、一つの慰めとしていた時代でもあったようだ。



そんなとき、父が四人目の母を運水して小樽の町へ引越して来た。



別々に住むのは不経済なので、父夫婦と一緒に住むこととなった。



いつまでも郵局に働いていても仕方がないと思っ、少しでも収入のあるがス会社の見習職工となった。



がス会社では一年間勤めさせてもらった。このころ無性に絵をかきたくなった。「油絵」という言葉を知ったのもこの時代である。



とにかく油絵をかい、みたくいび、乾きの悪い食用油に水彩絵具を溶いて一生懸命にかいた。



どうしても画家を志望して絵をかき始めたのではない。心の中からつきあがるようなものがあつてかかなくてならなかったのだ。今考えてみると、それも詩作やイラストをかいていた延長線上の行為だったのかも知れない。



あるとき、広告研究社という看板屋の前を通りかかった。

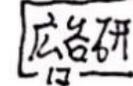


中で仕事をしていたのが見えたので、しばらく見てみると自分もかいてみたくなった。



勤めていたがス会社に辞職願を出した。

何か自分にふさわしい仕事が欲しかった。



結果的に雇ってくれることとなった。

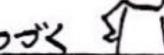


お世辞で「辞職願」を出した。

小さいときから、かんとこの好きだった自分に向いてるのほこの仕事だと思っ、ぜひ雇ってほしいと頼んだ。



こうして斎藤清の看板店修業時代が始まるのである。



私の半生

第六話

へ前回までのあらすじ

文相・藤清は会津坂下町にて

父清作と母ルイの間に生まれた。

父の仕事がうまくいかず、四歳の時

家族で夕張へ。

しかしそこで父が

足に重傷を負い

大正六年には

母ルイがセクになる。



その後、父の勧めで  
寺の小僧となったが  
寺が様で仕方なく  
二度逃げ出す。

学業を終え、小樽の薬局に奉公するが  
待遇の悪さ、将来性に不安を感じ  
収入のいいカス会社にて転職する。



広告研究社

い

この頃が、無性に  
絵が描きたくなる。  
たまたま通りかかった  
「広告研究社」という  
看板屋を見て、  
自らが向いよう仕事は  
これだと思い、  
カス会社を退職。

そして何とか広告研究社に雇ってもらえる  
ことになり、大川藤清の看板店時代が  
始まるのである。

看板店修業時代  
く文字の影と見ると

幸い雇とはくれたが、  
看板の修業はさせし  
もりえなかつた。



仕方ないから、自分が練習した  
例えは広告の文字。

明朝体が書けるように  
すれば一人と別。

ゴシック体  
明朝体  
勘

偏や旁(フクリシ)のバランスが  
大切なことを知った。  
それはそのまま、絵の世界の  
構図にも言えることだった。

また時間のあるときは  
板に紙を張り、



先輩がかいたものを  
まねながら、似顔絵の  
研究をした。

板にトタン板を張って枠組み  
をし、白いペンキを塗る。

本来ならそこに字を絵をかいていく  
わけだが、



私の仕事はいつも白いペンキを  
塗った段階で終わった。

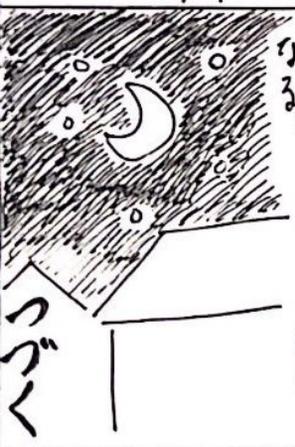
好きな勘亭流にも  
同じことか言えた。

私には文字の間に  
見えかくれする自地が  
あざしい魅力と映った。

勘

文字の影のようなものが  
白地を先に見るとは  
私の絵をかく基本に  
発展した。

この文字と絵の勉強は  
のうのう役に立つことに  
なる。



「ここで働くことに何か物足りなさを覚えるようになった。仕事も増え、忙しくはなぞ、こいくのだが、」



「つには看板製作技術を教えてもらえたこと、もう一つは同僚のことがあった。」

「私よりも後に入、た人なのに、体が弱いということで、その人はも、ぼろかく方にまわり、」



「外回りや取り付けばかりしなければならぬ、損な役回りになっていた。」

「そんなことに嫌気がさしたのと、せむしっかりした看板広告の技術を身につけたいとの強い願望から広告研究社をやめて、」



「札幌市の宮田看板店に移った。そこで絵筆をもたせられたが、お前は身につけておるものかほとんどだった。」

「父たちは別れて、札幌市に移った。そうしてどのくらい続いたろうか。父から次のようなことを言ってきた。」

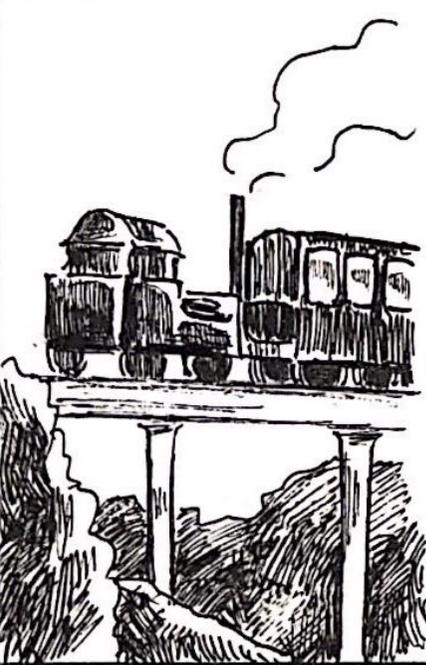
「小樽にお前と一緒に仕事をしたいといっている人がいる。」

「注文はその人がとってくるから、ただ書いてさえくれればいい。」

「その人がいうには、お前はもう一人と別なだから、いまさら修業もないだろうと言っている。」



「心残りではあったが、父の言うことをまいて、再び小樽へ戻った。」



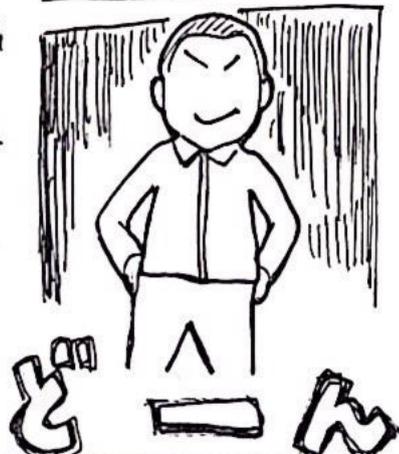
# 不定期連載「私の半生」第八話へ再び小樽へ

小樽での看板店の共同経営が始まった。やってみると、共同経営とは聞いても、結局は自分で書いたものを自分の草で運び自分で取りつくる仕事であった。



ここでは自分一人の方がやりやすいと考へて独立を考へ、入舟町の成田山の前に自分の店を出店した。

看板のすずらん



店の名を「看板のすずらん」と命名した。

私には昔から一つのくせみたいなものがあった。

「私の半生」  
「柿の会津」  
「実りの会津」  
「春の鎌倉」

「会津の冬」とか「〇〇の〇〇」というような題が好きだったらしい。

幸い看板店は繁盛した。少年を雇い入れたがそれも仕事をこなすことができず、二晩も三晩も徹夜しなければならぬこともあった。こうした仕事は四年半ほど続き、軌道に乗った。



ゼニカネにはとにかく厳しいのが実社会。はたちそこそこの若僧が仕事をくれと言った。ておいそれと仕事がもらえろ性質のものではない。



何が自分への存在を知ってもらわねばならない。

そうなるべくると、仕事で勝負するしかない。



看板がよそのものより引かせて見えるように書かなければならぬとキモチ銘じた。